

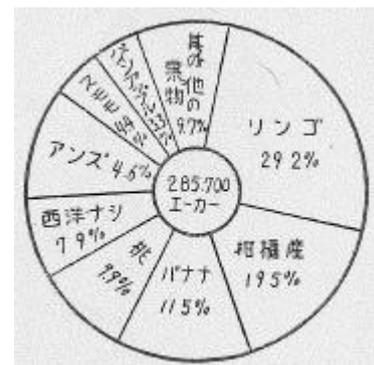
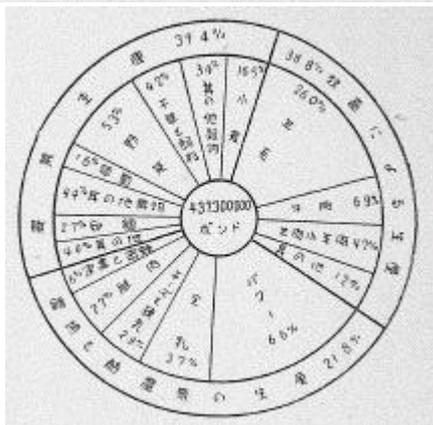
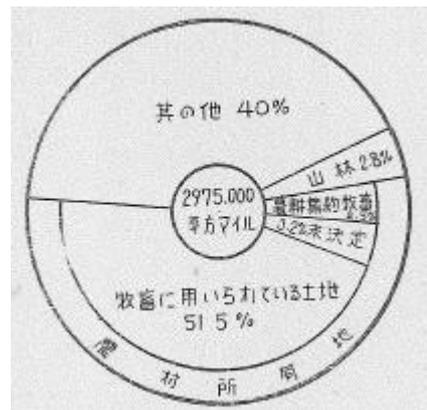
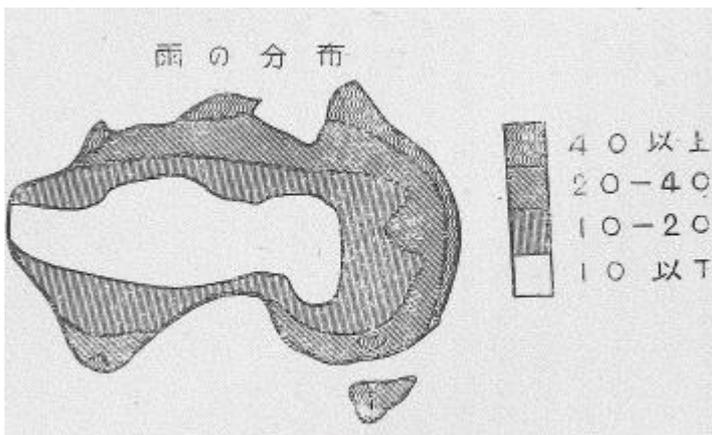
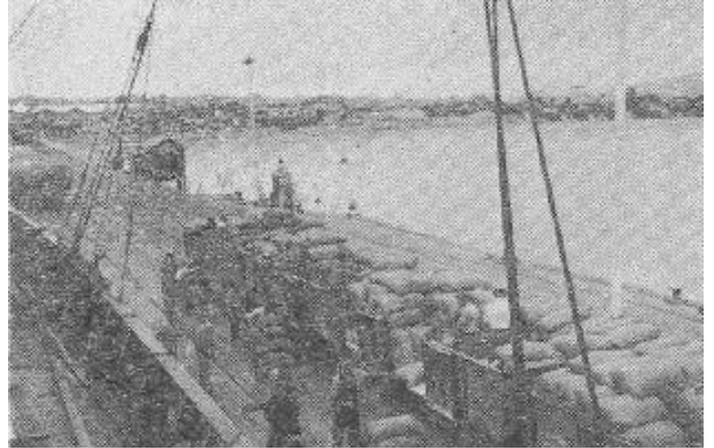
オーストラリアへの旅 (8)

花尾省治

『オーストラリアの産業』

オーストラリアの歴史は無から始まっているとい
ってよい。前にもいったようにイギリス人がこの国に
移る前までは一頭の馬も牛も羊も又一匹の兎さえい
なかったし耕作も行われていなかった。それが今日世
界の農業国として綿羊、酪農の王座の地位についてお
る。オーストラリアは農畜産物である羊毛、小麦、酪
農製品、食肉、砂糖等を輸出し国で必要とする消費財
繊維製品(石油、紙、薬品)及び工業原料機具(機械、
農用トラクターの如き)を輸入する一つの変った型を
つくっている。そしてこの国の最大の取引国はイギリ

スであり、その連邦諸国、米国等である。



主要作物植付面積収穫差 (1952)

種別	植付面積 (千エーカー)	収穫量 (千ブッシェル)
小麦	10,839	159,725
大麦	1,118	21,909
からす	2,365	34,506
砂糖きび	282	5,327
とうもろこし	170	4,018

日本との関係は小麦、大麦、羊毛等をオーストラリ
アから輸入し、日本から金鋼、鉄柱、陶器、綿布、紙
等を輸出している。51~52年の日本輸入額4,900万ポ
ンドで日本から輸出4,400万ポンドとなっている。

雨量分布図で見られるとおりオーストラリアは降
雨量の少ないところで20インチ (508mm) 以下のと
ころが大陸全体の3分の2を占めており10インチ以下

岡山畜産便り1957.02

のところもかなりの地域にわたっている。日本の雨量は60~80インチ(1,500~2,000mm)位である。この降雨量も季節的に違っており南オーストラリアでの話では5月から8月が雨の時期で特に6月~8月が最も多く反対に9月から4月にかけて降雨の少ない時である。だから麦類の播種は雨の時期にあたり乾燥期が丁度開花から結実に入るので、小麦作が天候に恵れて良質のものが収穫でき従ってパンに作ってよいものができる。その上機械化された大農経営であるので、豪州小麦を日本へ輸入しても日本小麦より安い値段ではいる。日本の小麦作は経費は米同様にかかり収穫期が雨の多い時期となる関係上良質のものが得られない。最近日本の小麦作について批判されており、小麦に代るよい作物又飼料作物等を取り入れることがいわれているのも日本の小麦作が労力の割に収益が上がらず弱体であることによる。

オーストラリアの小麦はアメリカ、カナダ、アルゼンチン等と共に世界の4大輸出国となっており他の3ヶ国と同様小麦の生産があがったのは1945年からである。小麦は羊毛と共に輸出の大宗でオーストラリア経済のバロメーターとなっている。4大輸出国の小麦総計は(54~55年)16億3,700万ブッシェル(1ブッシェルは本邦の2斗1合)でこの収量は約2ヶ年間の世界輸出量の持越をもっている。小麦の植付面積は1,083万9,000エーカー小麦収穫1億5,973万ブッシェル(52~53年)となっている。

降雨量の不足がオーストラリアにとって一つのなやみであり、これが農業の発達をはばんでいたのだが調査の結果降雨の少ない地方にも地下水が豊富にあることがわかり、掘抜井戸により又政府が大規模灌漑を行い農場を開いていったので水不足からオーストラリア農業を救ったともいえる。掘抜井戸の多い地帯はクインズランド、南オーストラリア東北部、西オーストラリアの北部、ビクトリア西北部等で、中でもビクトリアの掘抜井戸は近頃までまったくの砂漠であったところを指折りの小麦産地に一変させたのである。

小麦の輸出は輸出港にばら小麦貯蔵庫(サイロ)ができていてそこから船に機械でおくられるようになっている。これはニューサウス、ウエールズ、ビクトリア両州に発達している。南オーストラリアのポー

ト・リンカーンではサイロがなく麻袋入りの小麦が波止場まで汽車でおくられてきて船に積込前日本の食糧検査員と同様金属製の身刺で麻袋に突きさし色と匂をかいで不合格品には×印を入れこれは、はねて輸出をしない。検査の際の身刺が日本のより細く直通しである。検査した小麦は一応缶にうけて(腹の部に缶をぶら下げている)はいるがこぼす方が多く小麦はそこから一ぱい散ばっている。日本であればこぼしもしないし、こぼれれば拾いもしようが、この波止場に鴉が随分よってくるが小麦には食傷しているのかついばみもしない。

小麦の輸出港はシドニー(ニューサウスウェールズ州)ウィリヤムス・タウンジロン(ビクトリア州)ポートアデレード。ポートピリー。ポートリンカーン。(南オーストラリア)フルマントル。ジェラルトン。(西オーストラリア)等である。南オーストラリアでオームの群がユーカリ樹に黒くなる程とまっていた。オーストラリアのオームは日本のスズメのように米でなく麦をあらすといっている。オームも白いものと赤褐の胸毛のものといえるが赤の方が多い。

果物は国が大きく南緯10度から45度範囲であるから色々な種類の果物に恵れている。我々が行っていた当時メルボルンの店頭にていた果物はバナナ、リンゴ、ナシ、オレンジ、スイカ、イチヂク、トマトといったものが並べられていた。大陸の北部クインズランドでは熱帯果実パインアップル、パパイヤ、マンゴーの類もできるし、ニューサウス、ウエールズ州では柑橘、林檎、ビクトリア州では林檎、桃等ができる。特にタスマニアは林檎の産地として知られている。林檎は英国向に出荷されており、1955年英国向に3万箱位が出荷されている。その他アンズ、桃、梨が約4万箱(1955)が販売されている。葡萄は葡萄酒と干葡萄用とに別れ、葡萄酒用植付が4,550エーカーで、干葡萄の植付面積は2,800エーカーとなっている。メルボルン、アデレード市の郊外に果樹地帯ができています。

砂糖もオーストラリアの農産物の主要作物の一つとなっており、クインズランド及びニューサウスウェールズの2州で生産され、特にクインズランドが主産地である。(写真大麦積込前の検査)